

様式4

令和元年度自己評価シート(年度末評価)

校番	10	学校名	広島県立尾道北高等学校	校長氏名	松井 太	全日制	本校
----	----	-----	-------------	------	------	-----	----

学校経営目標								
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	次年度に向けての見通し及び具体的な改善方策	担当部等
			目標値	実績値				
1 課題発見・解決学習を推進し、主体的学びを深める。								
1-1 生徒自身が主体的に学び、問いを振り返ることができている。	授業評価アンケートにおいて、「問う力」がついたと回答した割合	71.8%	80%	76.9%	B	昨年度と比べ大幅に向上し、第1回(7月)のアンケートでは76.1%であったが、第2回(12月)には若干向上している。	授業で生徒が問いを見出すような教材作成、授業構成等の授業研究の在り方を改善する。	教育研究部 教務部 各教科
	授業評価アンケートにおいて、「自分で判断して家庭学習をする」と回答した割合	新規	70%	78.1%	A	第1回(7月)のアンケートでは76.2%であったが、第2回(12月)には、1.9ポイント向上し、目標値を達成している。		
1-2 産業社会と人間及び総合的な学習(探究)の時間を通じて、課題解決や探究する態度を育てる。	生徒アンケートにおいて、「より深く探究する意欲や態度が身についた」と回答した割合	新規	70%	95.5%	A	SDGsを学習したことや、課題研究もグループ研究から個人研究に変更したことが、生徒が主体的に取り組みことに効果的であった。	「めざす尾道北高の学び」を基に、課題研究の評価や、カリキュラム改善を図り、生徒の探究の質を向上させる。	教育研究部
1-3 ICTを活用し、深い学びにつながる授業を実施している。	ICTを活用して、生徒の深い学びに繋げる授業ができた教員の割合	89%	90%	92%	A	授業でのICT活用は定着した感がある。深い学びを促すための校内研修の実施回数は1回に留まった。	生徒一人一台のコンピュータ整備と関連して、個別最適化の学びに向けての、校内研修の更なる充実を図る。	ICT活用推進委

【評価結果の分析】

【今後の改善方策】

(1)教育研究部

生徒自身が主体的に学び、問いを振り返ることができている。(教育研究部)

第2回(12月)の授業評価アンケートでは、「共感的関係、協働的学び」に関する質問以外の項目において、第1回の数値を上回っている。また、全項目の平均が80.5%と高水準の結果となっている。ただし、「問う力」に関する項目の肯定的割合が他の項目と比較すると最も低く、「めざす尾道北高の学び」と関連付けながら、活用・探究の取組のさらなる充実が必要である。「主体的な学び(家庭学習)」に関する項目の肯定的割合については、目標値は達成したが、引き続き自律した学習者を育成することを大切に、学習の方法の指導や単元ごとの振り返りなどを充実する。

産業社会と人間及び総合的な学習(探究)の時間を通じて、課題解決や探究する態度を育てる。(教育研究部)

「めざす尾道北高の学び」を基に、産業社会と人間及び総合的な学習(探究)の時間のカリキュラム開発や改善を行った。引き続きカリキュラム改善を図るとともに、産業社会と人間及び総合的な学習(探究)のゴールである「課題研究」の評価について研究及び研修を推進し、組織的な指導の充実を図る。

(2)ICT活用推進委員会

授業や学校行事などに、ICT活用が日常的に行われる状況は定着した感がある。今後は、生徒に深い学びを促すことのできる授業づくりに向けての研修の充実を図る必要がある。次年度入学生からは、一人一台のコンピュータ整備が始まり、個人端末の効果的な運用を研究し、個別最適化された学びに向けた授業の充実を図る。

様式4

学校経営目標								
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	次年度に向けての見通し及び具体的な改善方策	担当部等
			目標値	実績値				
2 教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす。								
2-1 生徒が学習意欲を高め、確かな学力を身に付けている。	1年進研模試(1月)国数英総合平均点偏差値	1月 56.3	61.0 以上	1月 60.1	B	7月 56.5 (国語 56.3, 数学 54.6, 英語 56.0) 1月 60.1 (国語 58.2, 数学 59.8, 英語 58.3)	上位層には英語力の引き上げと教科バランスの取れた学習。下位層には引き続き、補習や質問教室などを活用して基礎学力の定着を図る。	1学年
	2年進研模試(7月・1月)の国数英総合平均点偏差値	7月 58.7	60.0 以上	7月 54.9	B	7月 54.9 (国語 55.0, 数学 52.6, 英語 56.1) 1月 57.3 (国語 56.5, 数学 56.1, 英語 58.2)	国・数・英3教科平均偏差値 70以上は13名(昨年25名, 一昨年20名)偏差値 54~58にボリュームゾーンがある。成績中位層の国語の学力を引き上げる指導を教科と連携して実施する。	2学年
		1月 58.9		1月 57.3				
	1年進研模試(7月)国数英総合偏差値に対して、1年1月、2年1月の偏差値	1年 +0.9	+3.0 以上	1年 1月 +3.6	A	7月 56.5 (国語 56.3, 数学 54.6, 英語 56.0) 1月 60.1 (国語 58.2, 数学 59.8, 英語 58.3)	偏差値 70 以上は 11 名から 12 名とそれほど変化がない。偏差値 50 以下は 32 名から 24 名に減少。引き続き下位・中位層の学習習慣の改善と基礎力養成を行うとともに、偏差値 60~68 の層の上位層への引き上げを教科と連携して実施する。	進路指導部
2年 +0.4								
2-2 英語の4技能重視も含む新しい大学入試への対応ができています。	1年次 GTEC (12月実施)	83.2%	700点以上 80%以上	92.2%	A	授業において、Speaking を含めた表現活動の場面を意識した。 12月 Basic192名受験中、700点以上は177名であった。	外部検定試験の活用動向を注視しつつ、4技能のバランスのとれた習得を目指す。	進路指導部 各教科
	2年次GTEC (12月実施)	新規	700点以上 85%以上	94.9%	A	オンライン英会話をはじめ Speaking 活動を増やした。 12月 Advanced178名受験中、700点以上は169名であった。	外部検定試験の活用動向を注視しつつ、4技能のバランスのとれた習得を目指す。	

様式4

	大学入試センター試験 で全国平均を5点以上 上回った科目数	8/16	全科目	8/16	C	全国平均を5点以上上回った科目が 8科目であった。	各教科で大学入試に向けての再 度指導内容・時期・方法を検討す る必要がある。
	センター試験で 650/ 900 点以上の生徒の割 合	35.6%	40%	26.1%	C	センター試験の平均点が昨年度より 20点程度下降する予想ではある。	各教科で大学入試に向けての再 度指導内容・時期・方法を検討す る必要がある。

【評価結果の分析】

【今後の改善方策】

・1学年 1年7月国数英総合偏差値 56.3 から 58.7 に 1.4 ポイント上げることができたが、11月模試までの結果しかわかっていないため、1月模試で目標の+3以上に届くかは不明である。基礎・基本ができていない生徒の学習習慣は少しずつ改善されているが、上位層が伸びていない。偏差値 60 以上の生徒は 82 名と過年度と比較しても多いので、各教科と連携しながら、その生徒達を引き上げる取り組みを実施していく。

・2学年 1年7月国数英総合偏差値 55.4 から 56.8 に 1.4 ポイント上げることができたが、11月模試までの結果しかわかっていないため、1月模試で目標の+3以上に届くかは不明である。特に数学の成績が 55.4(1年7月)→53.3(1年11月)→56.5(1年1月)→52.6(2年7月)→57.5(2年11月)模試によって乱高下しているところが不安なところである。各教科、各成績層の結果の分析を行い、各層に応じた指導を行うとともに生徒自身に自らの課題を見つけさせ、自らの計画によって取り組ませることが必要である。

大学入試センター試験で全国平均を5点以上上回った科目数については、センター平均点が中間発表の段階の数値を利用しているが、ほぼ昨年と同じ状況になっている。

センター試験で 650/900 点以上の割合はセンター試験の平均点が下降したので昨年の 35.7%から 26.1%と下降した。科目による差が大きいことから、各教科での分析と生徒の実態にあった今後の指導の方法を再検討する必要がある。

様式4

学校経営目標									
	達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	次年度に向けての見通し及び具体的な改善方策	担当部等
				目標値	実績値				
3 高い志や夢を持たせ、進路希望を実現させる。									
	3-1 生徒が高い目標を持ち、その目標を維持できている。	難関大学・国公立医歯薬学部・広島大学・岡山大学合格者数	47人	65人	52人	B	難関は過年度と比較しても多くの合格者を出すことができたが、広島大学の合格者が少なすぎたから。	広島大学、岡山大学に出願できる学力層の生徒を理社と連携しながら、育てていく。	進路指導部
	3-2 新しい大学入試において、主体性の評価も含めた多面的・総合的な評価への対応ができています。	外部のセミナー、コンテスト、コンクール等へ参加(応募)した生徒(1, 2年)の割合	46.8%	60%	29.8%	C	1学年 90名/197名=45.7% 2学年 25名/189名=13.2%	まだ参加していない半数への生徒への働きかけを学年、教科で行っていく。	進路指導部 各学年

【評価結果の分析】

【今後の改善方策】

1・2学年から継続しているきめ細かい指導により、生徒が高い目標を持って志望校を考えることはできている。しかし、今年度はセンター試験での数学の難化の影響もあって、難関大学・難関学部・広島大学・岡山大学への出願者数はやや伸び悩んでいる。個別試験に向けて現在対策を行っている。

外部のセミナー、コンテストに参加した生徒について、2年生と1年生の人数の違いは、3月に実施するエンパワーメントプログラムとオーストラリア研修への参加者数に違いによるところが大きい。2年生は1年次にエンパワーメントプログラムに参加している生徒が多いため、今回の参加者数は増えていない。また、今年度からシンガポール・マレーシアへの海外修学旅行を実施することに伴い、その他の留学に参加する生徒も昨年より少なくなっている。しかしながら、海外修学旅行や全員参加によるAIについての特別講義など、高い志や夢を持たせるための新たな取組は実施できた。

昨年同様に外部のセミナー、コンテスト、コンクール等へ案内を積極的に行い、1年生は約半数の生徒は参加することができた。さらにまだ参加をしていない生徒に参加案内をし、働きかけを行っていく必要がある。

様式4

学校経営目標								
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	次年度に向けての見通し及び具体的な改善方策	担当部等
			目標値	実績値				
4 リーダーに求められる道徳性や社会性を身に付けた豊かな心を育成する。								
4-1 自律的で社会に貢献する態度(リーダーシップ・ボランティア精神など)を身に付けている。	文化祭・体育祭等の行事に当事者意識を持って参加した生徒の割合	新規	70%以上	99.2%	A	肯定的評価が99%を超えた。(文化祭 99.1%, 体育祭 99.2%)	当事者意識を持っていない生徒への声掛けや、後押しをする。	生徒指導部
	年間を通して、1回以上校外のボランティア活動に参加した人数	634人	600人以上	のべ630名	A	昨年度同時期に比べ増加した。今年度も校外での参加呼びかけで増加した。(校内 489名 校外 141名)	生徒の活動が中心となって、地域貢献、社会貢献へとつながる行動をするよう促す。	
4-2 生徒一人ひとりの学校生活が大切にされ、相談しやすい体制が構築されている。	「悩みごとを気軽に相談できる場が校内にありますか」という生徒へのアンケートの肯定的回答の割合	77%	75%	79%	A	スクールカウンセリングの利用だけでなく、毎日のライフガイダンスルームの開設や定期的な広報活動を行った。保護者へも相談日を月1~2回案内するとともに、設定日以外についても随時対応した。また要支援生徒について早期発見・対応できるよう、長期休業明けのアンケートや心理検査を活用し、面談を実施した。	要支援生徒は年々増加している。広報活動の推進や相談しやすい場づくり、教育相談体制の充実に取り組む。スクールカウンセラーの活用については、生徒・保護者への浸透が進んだと感じる。効果的な活用がさらに進むよう、ライフガイダンスルームと同様、工夫が必要である。	健康教育部

【評価結果の分析】

【今後の改善方策】

(1) 生徒指導部

文化祭へ当事者意識を持って参加した生徒は、「十分できた」が68.9%、「できた」が30.2%である。「あまりできなかった」が0.5%(3名)、「できなかった」が0.4%(2名)である。体育祭へ当事者意識を持って参加した生徒は、「十分できた」が66.3%、「できた」が32.9%である。「あまりできなかった」が08%(4名)、「できなかった」が0.0%(0名)である。肯定的な評価をしている生徒は、さらにより良いものを創造できるよう頑張っていくことが期待できるが、否定的な評価をしている9名については、文化祭、体育祭ともに否定的な評価をしていない。ボランティアについては、昨年度から、校外への参加呼びかけを行っている。校外ボランティアへの参加が141名に増えた。行き先も多岐に渡り、それぞれの進路や興味関心であったり、社会貢献の意識が醸成されている。校内での参加が減少しているため、部活動への帰属意識や、集団の力を高めていくためにも、さらに声掛けをし、学校の活性化にも寄与する活動を目指す。

(2) 健康教育部

生徒対象にライフガイダンスルーム毎日昼休憩に開設するとともに、定期的に広報活動を行った。広報紙「ライフガイダンスだより」は身近に感じてもらえるように、保健委員(生徒)が教室掲示と生徒配布をおこなっている。ルームの存在自体は少しずつ認知は進んでいるのではないかと考えているが、利用は特定の生徒になっており、どのような運営にすることが生徒にとって利用しやすい形なのかを考えていく必要がある。また月1~2回「こころとからだの相談日」として、スクールカウンセラーによる教育相談日を設定した。生徒・保護者・教職員の利用もすすみ、限られた時間ではあるがスケジュールいっぱい面談希望が出ており、次年度もぜひ事業活用したいと考えている。

また昨年度まで行っていた心理検査に加え、長期休業明けアンケート(GW・夏休み・冬休み)を実施し、要支援と思われる生徒については、部で面談をおこなった。そこで得られた情報を学年会、学年主任会議等で共有し、生徒理解・支援につなげた。支援を必要としている生徒は増加していると考えられ、教育相談体制の充実に取り組む必要がある。また職員対象としては、特別支援教育研修会や特別支援教育会議・プロジェクト会議をもち、支援を必要とする生徒にかかわる教職員へのサポートをすすめた。

様式4

学校経営目標									
	達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	次年度に向けての見通し及び具体的な改善方策	担当部等
				目標値	実績値				
5 社会に信頼される学校づくりを推進する。									
	5-1 中高の相互理解を深める取組がなされ、中学校や地域社会への説明責任が果たされている。	選抜(Ⅱ)入試の志願者倍率	1.11 倍	1.15 倍以上	1.01 倍	B	尾三地区の生徒数減が大きく影響したが、今年度一般公開した文化祭及び海外短期研修、海外修学旅行、エンパワーメントプログラムなど、本校の魅力を伝えることができたことから、実績値となったと考える。	尾三地区及び福山地区への方法活動を積極的に実施していく。本校ホームページで「生徒の活動状況」を発信する機会や本校の魅力を伝える機会を増やす。	総務部

【評価結果の分析】

【今後の改善方策】

選抜Ⅱの志願者倍率を増加させるため、出来るだけ生徒の頑張っている姿を伝えることをスタンスに、中学校や地域社会に向けて次のような取り組みを行った。

(1) 中学校への本校情報提供の回数について

- ・中学生の訪問受け入れは2校実施した。学校説明、授業参観、校内の施設案内を行った。
- ・中学校主催の進路説明会は13校で実施した。今年度から実施の文化祭の紹介や海外修学旅行、海外短期研修、エンパワーメントプログラムの実施などグローバルな体験活動の充実をPRした。
- ・入試説明会は、三原会場、尾道会場(本校)の2か所で実施した。PTAと保護者との座談会や、生徒会生徒と中学生との座談会の場を設定したことから参加者には大変好評だった。教育内容説明についてもそれぞれの担当教員が行い、わかりやすい説明で詳しく学校の様子がわかったと好評であった。
参加人数 三原地区 64、尾道地区 165 合計 229 (※数字は、アンケート回収数による)
- ・出張講義が7校申込(昨年度4校)。昨年度より増加した。2月末までに5校実施した。3月実施予定の2校は中止となった。

(2) 8月のオープンスクールへの参加者について

- ・オープンスクール参加者数は中学生 324(382)名、保護者等 218(230)名で、計 542(612)名であった。昨年同様オープンスクールは、暑さ対策も兼ねて、体育館では開会行事のみ行い学校紹介は模擬授業教室(生徒)、多目的教室(保護者)に分けて実施した。各教室ではオープンスクール実行委員がパワーポイントや動画を活用してプレゼンテーションを行った。生徒、保護者共にほぼ100%の肯定的評価だった。生徒による学校紹介及び座談会は生徒の主体性を評価していただいた。保護者からは「北高の生徒さんが生き生きといてよかった」「生徒さんの説明がわかりやすかった」「先生方の学校説明がよかった」等の多くの肯定的な意見が多かった。PTA 役員による保護者目線での説明等も好評であった。昨年と比較して人数が減少したが、日程を盆前にしたことで、中学校の部活動大会等と重なったこと、尾三地区中学3年生生徒の減少等が考えられる。来年度の日程については検討していく必要がある。

(3) 広報活動の一環として文化祭取材の朝日新聞記事を配付や、説明会資料(P.P)の改善を図った。

(4) 本校ホームページの更新回数は85回であった。昨年度より減少したが、分掌内での情報発信担当の人配等を他業務と併せて検討していくことも必要である。

様式4

学校経営目標									
	達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	次年度に向けての見通し及び具体的な改善方策	担当部等
				目標値	実績値				
6 働き方改革について									
	6-1 限られた時間で成果をあげる工夫がされている。	時間外勤務時間を1月について100時間未満の割合及び1年について720時間以下の割合	—	[新規] 100%		C	全体として時間外勤務は減少しているが基準値は達成できていない。教師が担う業務が旧態依然のままで業務改善があまり進まなかった。	勤務時間の徹底と勤務時間・健康管理を意識した働き方の促進、学校及び教師が担う業務の明確化・適正化、学校の組織運営体制の在り方を見直す。	管理職

【評価結果の分析】

【今後の改善方策】

出勤・退校時間及び時間外勤務時間の集約状況を見ると、月ごとの平均や個人の時間外勤務時間の総時間数など、全体として時間外勤務は減少している。しかしながら、目標値となる時間外勤務時間を1年について720時間以下の割合100%には至らなかった。

働き方の見直しへの取組として、勤務時間の徹底と勤務時間・健康管理を意識した働き方の促進、学校及び教師が担う業務の明確化・適正化、学校の組織運営体制の在り方を見直し等の工夫をする。

様式4

各教科分析

評価指標	教科	評価	理由	次年度に向けた具体的な改善方策
授業評価アンケート において、「問う力」がついたと回答 した割合	国語	B	7月 75.3 12月 78.1 知識・理解、読解が中心になり、探究場面が十分に設定できなかった。	単元毎に指導内容の取捨選択を行い、時間を確保し、探究する場面を設定する。学習した教材に関連する現代社会におけるテーマについて、生徒自身が問いを立て、ペア・グループ活動で考えさせる。
	地歴・公民	B	今年度12月の教科平均が76.4%となり、昨年度同時期よりも3.4ポイントの大幅な上昇となった。	生徒の実態に応じて問いを改善することで、生徒自身が主体的に知識・理解を深めることができる授業を展開する。
	数学	A	7月 79.9→12月 81.5 となり、目標の80.0を上回ることができたため。	生徒自身に考えさせる場面、ペアで対話させる場面、全体に説明させる場面等を設定することで、問う力を育成する。
	理科	B	7月実施 78.0%、12月実施 77.8%であり、全体平均よりおよそ1.0ポイント高い結果であった。	基礎基本の定着も大事にしながら、「活用・探究」の場面を単元ごとに計画的に導入し、探究心の向上を図る。
	保健体育	B	「考える活動を増やしたので問う力が上がった。	どうしたらどの練習方法が実践に結びつか考えさせる時間を増やす。
	芸術	B	7月実施 69.8%、12月実施 70.5%と僅かに上昇したが、表現の仕方や効果を問う時間を十分に確保できなかった。	授業時間の確保と、教師からの指導助言だけでなく生徒自身が目指す表現に向けて考え試行する機会を適切に設定する。
	英語	B	教科平均 第1回 80.3%(学校平均 76.1%) 第2回 80.4%(学校平均 76.9%) いずれも80%を上回った。	・生徒が疑問点を明らかにし、自ら目標(「問い」)を持って授業に参加させる。また、学んだ内容に関して生徒自身が問いを作る場を設定する。 ・授業の様々な場面で、生徒に「なぜ」を問う。その際に、きちんと根拠を含めて考え、答えることを習慣化させる。
	家庭	B	授業者側が課題(問い)を設定することが多かった。知識や技術の習得が、どのように自らの生活と関連づいているかを考えるような授業展開を考える必要がある。	自らの生活と関連付けて授業に取り組めるよう、自分や家族の課題(問い)をたてながら、すすめていく。

様式4

評価指標	教科	評価	理由	次年度に向けた具体的な改善方策
大学入試センター試験で全国平均を5点以上上回った科目数	国語	A	本校の国語の平均は135.5点で全国平均は119.3点であった。(200点満点)100点換算すると8.1点上回った。	評論では文章と自分の経験とを結びつける応用的思考力を問う問題が出題され、漢文ではイラストを選択する新傾向の出題があった。今後も基礎・基本を徹底するとともに、新傾向の出題に対応した総合的な思考力の育成を重点的に行う。
	地歴・公民	B	日本史B・現代社会・倫政の3科目で上回ったため。	生徒の実態に応じて、授業改善を行う。
	数学	C	数学①(+2.8)、数学②(+0.2)のどちらも平均点を上回ったものの、目標には及ばなかった。	新傾向の問題への対応も含めて、授業進度や形態についても検討を行い、総合的な思考力の育成を行う。
	理科	B	物理(+5.7)、生物(+9.3)で目標を上回ったものの、化学(+0.2)・化学基礎(+1.0)は目標に届かなかった。	基礎基本の定着を確実にするとともに、新傾向の問題への対応を踏まえて「活用・探究」の場面を單元ごとに計画的に導入し、探究心の向上を図る。
	英語	A	筆記およびリスニングともに全国平均を5点以上上回った。	今年度の指導内容を総括し教科内で共有しながら、新テストに対応した指導の在り方の研究を継続していく。

評価指標	教科	評価	理由	次年度に向けた具体的な改善方策
1年進研模試(1月)の国・数・英の平均点偏差値	国語	B	1月の偏差値 58.2(7月 56.3 11月 57.4)	授業～演習(週末課題を含む)の往還を通じて、学習方法や読解力・思考力をつけ、特に上位層を増やす。
	数学	B	1学年の平均偏差値(7月 54.6, 11月 58.7, 1月 59.8)であり、目標にわずかに届かなかった。	1学年は下位層に対しては「尾北 基礎 100」などを利用して基礎事項を絞って習熟ができるように繰り返し指導していく。中上位の生徒には基礎を徹底しながら発展問題に対応できるよう指導していく。
	英語	B	1年進研模試の偏差値の推移(英語) 7月 56.0 → 11月 56.4 → 1月 58.3 7月と比べ、偏差値 70 以上は8名→16名、60 以上は 56名 →65名、偏差値 50 未満は 44名→28名。	基礎事項を徹底させ、下位層だけでなく、上位層・中位層の引き上げを図る。また、上位層に対しては、状況を踏まえながら、より発展的な内容にも取り組ませていく。アウトプットする場面を多く設け、論の展開や正確性を意識しながら、リスニングや表現問題にも取り組むよう指導する。

様式4

評価指標	教科	評価	理由	次年度に受けた具体的な改善方策
2年進研模試(1月)の国・数・英の平均点偏差値	国語	C	1月の偏差値 56.5(7月 55 11月 54.8) 7月と比べ、偏差値 70 以上は 10 名→17 名, 60 以上は 47 名→57 名, 偏差値 50 未満は 49 名→49 名。	下位層においては引き続き、授業では基礎・基本の徹底を図り、反復演習を行う。また、教科面談を活用し、個々の課題と今後の目標を明確化することで、全体的な引き上げを図る。
	数学	C	7月の平均点偏差値は 51.1 であり、1月の平均点偏差値も 56.1 であった。	下位層に対しては公式の確認、「尾北の数学 I A50, II B50」の反復を促す。中上位層には基礎を徹底しながら、大学入試問題にも触れさせ、発展問題に対応できるよう指導していく。
	英語	C	2年進研模試の偏差値の推移(英語) 7月 56.1 → 11月 56.4 → 1月 58.2 7月と比べ、偏差値 70 以上は 12 名→18 名, 偏差値 50 未満は 46 名→42 名。	下位層に対しては基礎的な事項を再徹底することで引き上げを図る。中・上位層についても、基礎を十分に定着させようとして発展的な内容にも取り組ませていく。特にリスニングに関して定着が不十分な生徒が見られるので、学習方法を確立させ、力を付けさせる。

評価指標	教科	評価	理由	次年度に受けた具体的な改善方策
1年7月進研模試国数英総合偏差値に対して、1年1月、2年1月の偏差値	国語	B	1年進研模試の偏差値の推移 7月 56.3 → 1月 58.2 7月と比べ、偏差値 70 以上の上位層は 12 名→10 名とわずかに減少したが、偏差値 50 未満の下位層が 54 名→31 名と激減した。 2年進研模試の偏差値の推移 1年7月国語 54.2 → 2年1月国語 56.5 偏差値 70 以上が 11→17 と増加し、偏差値 50 未満は 65→49 と減少した。60 代、50 代はほぼ変わらなかった。	1年については、強みの漢文を中心に、古文単語力をつけていくことで、古典で安定して得点できるよう指導する。(特に中・下位層)現代文が強みであるので演習も適宜取り入れながら、テーマ知識などのインプットと思考・記述(アウトプット)にバランス良く取り組ませる。(特に上位層) 2年については、中・下位層に対して基本事項を徹底し、3年夏休みまでの習得を目指す。上位層には発展的な課題に取り組ませ、総合的な思考力を身に付けさせる。
	数学	B	1年進研模試の偏差値の推移 7月 54.6 → 1月 59.8 7月と比べ大きく伸びており、上位層も増加した。 2学年は 1年7月 55.4 から 56.1 の+0.7 であった。偏差値 60 台の生徒が 47 名から 58 名に増加したが 50 未満の人数も 38 名から 50 名に増加した。	1学年は、基礎基本の定着を確実にしたうえで、今後も講座別の利点を活かした指導を行う。 2学年は、下位層に対しては公式の確認、「尾北の数学 I A 50, II B50」の反復を促す。中上位層には基礎を徹底しながら、大学入試問題にも触れさせ、発展問題に対応できるよう指導していく。
	英語	B	73 期生: 1年7月 56.0 → 1年1月 58.3 72 期生: 1年7月 54.2 → 2年7月 56.1 → 2年1月 58.2	習熟度に応じた授業の中で、個々の生徒が自身の弱点に応じた学習を行うことができるように、学習方法の指導から丁寧に行う。

様式4

○大学入試センター試験で全国平均(100点換算で)を5点以上上回った科目数

科目	本校平均点	全国平均点	上回り度 (100点換算)	評価	理由	次年度に向けての具体的な改善方策	担当教科
国語	135.5	119.3	8.1	A	本校の国語の平均は135.5点で全国平均は119.3点であった。(200点満点)100点換算すると8.1点上回った。	評論では文章と自分の経験とを結びつける応用的思考力を問う問題が出題され、漢文ではイラストを選択する新傾向の出題があった。今後も基礎・基本を徹底するとともに、新傾向の出題に対応した総合的な思考力の育成を重点的に行う。	国語
世界史B	61.08	62.97	-1.89	D	成績下位層の生徒が多くみられたが、特に2年次の成績を維持できない生徒が多かった。	科目の特性上、教員主導による一定の知識注入は必要である。生徒の実態に応じて、主体的学習とのバランスをとる。	地歴・公民
日本史B	71.22	65.45	5.77	A	講義・問題演習を通して、上位層を中心に学力の定着がうまく行われた。	成績中下位層の学習意欲を高められるような、授業展開を組み込んでいく。	
地理B	69.53	66.35	3.18	B	昨年度と比較して成績中下位層の学習意欲が高く、成績を伸ばすことができた。	地理的な見方・考え方をういた授業展開を工夫し、生徒の理解を高めることで、積極的に学ぶ姿勢を育てる。	
現代社会	65.58	57.30	8.28	A	問いを工夫して生徒の理解を深め、後期は過去問演習に丁寧に取り組むことができた。	成績中下位層の学習意欲を高められるような、授業展開を組み込んでいく。	
倫理							
倫理、政治・経済	78.53	66.51	12.02	A	問いを工夫して生徒の理解を深め、後期は過去問演習に丁寧に取り組むことができた。	成績中下位層の学習意欲を高められるような、授業展開を組み込んでいく。	
数学ⅠA	54.7	51.9	2.8	B	問題の傾向の変化に対応しきれず、上位層の生徒の中にも点が伸びないものが多かった。	授業進捗の見直しや、演習の形式を再考するなど、成績中下位層の学習意欲を喚起し、上位層の自主性を伸ばす指導を行う。	数学
数学ⅡB	49.2	49.0	0.2	C	成績下位層の学習意欲を伸ばしきれず、弱点分野の克服が十分でなかった。	下位層の生徒が基本的事項を理解できていない部分が多いので、家庭学習の教材を工夫することにより基本事項の定着を行う。	
物理	66.4点	60.68点	5.72点	A	上回り度が5.72点と昨年度の4.36点とより上がり、目標である5.0点を超えた。	大学入試共通テスト思考調査の分析より、考察が必要となる実験を増やす。また、今年度の結果より基本的事項が理解できていない部分が多いので、家庭学習の教材を工夫することにより基本事項の定着を行う。	理科
化学基礎	57.4	56.40	1.00	C	成績下位層生徒の学習意欲を伸ばしきれなかった。	理解が十分でない生徒の学習意欲が減退しないように、到達度の確認や家庭学習の指導などを見直す。	
化学	55.0	54.79	0.21	C	成績下位層の学習意欲を伸ばしきれず、上位層の生徒の思考力向上が十分でなかった。	1年生の化学基礎の習熟を丁寧に行う。単元ごとの到達度の見取りや、自律した家庭学習に向けた指導を充実させる。	
生物基礎	34.6	32.1	5.0	A	結果は昨年度並みであるが、実際は生徒の状況が2極化しており、上位層と下位層の得点差が大きかった。	2年次の単位数が1となり、1年次の積み残しがあり、かつ2年次の1単位を大切にできなかった生徒は3年になっても伸びにくい。新2年には早くからその自覚を持たせる。共通テストでは問題の難化が予想されるので、新3年下位層には基礎基本の徹底、上位層には実験考察問題を多用した問題演習を行う。	
生物	66.9	57.56	9.34	A	全国平均が昨年度より5.3点下がったが、本校の上回り度は昨年の3.31点から9.34点と上昇した。	成績上位層には、実験考察問題・思考力問題を取り入れた問題演習を授業内で実施し、個別学力試験まで視野に入れた授業を行う。下位層には、基礎基本の徹底に重点を置いた授業	

様式4

						展開を実施する。	
英語筆記	137.4	116.32	10.54	A	問題の種類別に必要な力や解き方を解説しながら演習を行った。筆記・リスニングとも5点以上上回った。	各層の状況を踏まえ低学年時で基礎を固める取り組みを続ける。また新テストに対応した指導の在り方の研究と、個別試験までを見通した指導のあり方を、普段より教科内で共有しながら、効果的な指導を更に進めていく必要がある。	英語
リスニング	32.0	28.79	6.42	A			

様式4

経年変化

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
毎月2回以上の教科会を開催した教科数	7/8 教科	7/8 教科	7/8 教科	7/8 教科	6/8 教科	6/8 教科
アクティブラーニングを取り入れた授業を実施した教員の割合	—	〔新規〕 91%	100%	100%	100%	100%
定期考査において思考力を問う問題を取り入れた科目の割合	—	〔新規〕 100%	100%	100%	100%	100%
授業評価, 学校評価アンケートにおいてICTの活用による授業改善や業務改善がなされているかの問いに肯定的な回答をした割合	—	〔新規〕 生徒評価 44%	生徒評価 85%	生徒評価 94%	生徒評価 92%	生徒評価 92%
		〔新規〕 教員評価 授業 49% 業務 45%	教員評価 授業 86% 業務 85%	教員評価 授業 88% 業務 84%	教員評価 授業 89.5% 業務 80.0%	教員評価 授業 97.4% 業務 76.9%
HPを通じて研究成果を発信した回数	—	〔新規〕 11 回	17 回	34 回	1 回	1 回
生徒によるHP更新による情報発信回数	—	〔新規〕 4 回	6 回	13 回	0 回	0 回

様式4

(2)「教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす」ことについて

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
「学力や技能の向上を実感できましたか」という生徒による授業評価アンケートの平均得点率	75.8%	77.0%	76.0%			
「この授業を受けて、課題を解決するために必要な思考力が高まりましたか」という生徒による授業評価アンケートの平均得点率	73.4%	79.0%	78.9%	83.1%	81.1%	
年間の平均学習時間数（1年次生）	187分 (目標 180分)	180分	199分	196.4分	196.4分	205.5分
年間の平均学習時間数（2年次生）	198分 (目標 210分)	203分	200分	220.3分	200.6分	222.4分
年間の平均学習時間数（3年次生）	256分 (目標 240分)	277分	289分	261.9分	294.4分	285.9分
1年進研模試（7月・1月）の国・数・英の平均点偏差値	7月 60.2	7月 58.7	7月 57.4	7月 58.5	7月 55.4	7月 56.5
	1月 61.1	1月 61.7	1月 60.6	1月 59.9	1月 56.3	1月 60.1
1年進研模試（7月・1月）の国・数・英の平均点偏差値 50未満の生徒数	7月 15人	7月 23人	7月 27人	7月 18人	7月 47人	7月 32人
	1月 10人	1月 16人	1月 10人	1月 12人	1月 42人	1月 16人
2年進研模試（7月・1月）の国・数・英の平均点偏差値	7月 60.5	7月 60.9	7月 60.6	7月 59.4	7月 58.7	7月 54.9
	1月 60.2	1月 60.6	1月 60.6	1月 59.6	1月 58.9	1月 57.3
2年進研模試（7月・1月）の国・数・英の平均点偏差値 50未満の生徒数	7月 19人	7月 11人	7月 22人	7月 13人	7月 18人	7月 51人
	1月 10人	1月 14人	1月 28人	1月 25人	1月 21人	1月 40人
2年進研模試（1月）の理科・地歴の平均偏差値	理科基礎 62.2	理科基礎 63.9	理科基礎 64.7	理科基礎 59.5	理科基礎 63.0	理科基礎 58.4
	理科専門 56.6	理科専門 60.1	理科専門 56.2	理科専門 55.3	理科専門 56.7	理科専門 53.4
	地歴 57.0	地歴 60.1	地歴 59.7	地歴 58.3	地歴 58.8	地歴 55.7
	公民 54.7	公民 56.3	公民 59.0	公民 57.9	公民 59.1	公民 58.8
大学入試センター試験で全国平均（100点換算で）を5点以上上回った科目数	11/15	10/15	10/14	11/14	7/15	8/14

様式4

(3)「高い志や夢を持たせ、進路希望を実現させる」ことについて

・難関大学等及び広島大学・岡山大学の合格者数（現・浪）

（単位：人）

	平成23年 度卒 (24年)	平成24年 度卒 (25年)	平成25年 度卒 (26年)	平成26年 度卒 (27年)	平成27年 度卒 (28年)	平成28年 度卒(29年)	平成29年 度卒 (30年)	平成30年 度卒 (31年)	令和元年 度卒 (2年)
難関大学・国公立医学部医学科・歯学部・薬学部合格者数（現・浪）	29	18	25	19	21	25	29	27	25
広島大学・岡山大学合格者数（現・浪）	41	34	45	37	32	39	29	20	26
在校生の難関大学志望者数の割合	3学年平均 47%	3学年平均 40%	3学年平均 41%	1年生 72%	1年生 78%	1年生 75%	1年生 81%	1年生 65%	1年生 58%
				2年生 59%	2年生 54%	2年生 51%	2年生 52%	2年生 52%	2年生 45%
				3年生 37%	3年生 39%	3年生 38%	3年生 40%	3年生 32%	3年生 31%
				3学年平均 56%	3学年平均 57%	3学年平均 54%	3学年平均 58%	3学年平均 47%	3学年平均 45%

・グローバル人材の育成について

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
グローバルな視点で構成された課外活動等に自らが進んで参加している生徒数	—	—	[新規]30人	34人	53人	106人	117人

様式4

(4)「リーダーに求められる道徳性や社会性を身に付けた豊かな心を育成する」ことについて

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
「生徒会活動・行事・LHRの中で、人としてのあり方生き方、命の大切さ等を学ぶ経験をした」という生徒へのアンケートの肯定的回答の割合	90.1%	62%	61%	64%	68%	69%
部活動加入率	90.4%	90.2%	86.7%	85.8%	85.4%	86.8%
「校内の清掃や美化活動に努めていると思えますか」という生徒へのアンケートの肯定的回答の割合	84%	88%	90%	87%	87%	89%

(5)「地域社会に信頼される学校づくりを推進する」ことについて

・入学者選抜志願者数

(単位:上段は志願者数/定員,下段は倍率)

()内は受検年度	平成23年 (24年度)	平成24年 (25年度)	平成25年 (26年度)	平成26年 (27年度)	平成27年 (28年度)	H28年 (29年度)	H29年 (30年度)	H30年 (31年度)	R01年 (2年度)
選抜(Ⅰ)	70/60 1.17	77/60 1.28	76/60 1.27	66/60 1.10	76/60 1.27	71/60 1.18	59/60 0.98	83/60 1.38	58/60 0.97
選抜(Ⅱ)	147/140 1.05	198/140 1.41	145/140 1.04	151/140 1.08	147/140 1.05	159/140 1.14	134/140 0.96	155/140 1.11	144/142 1.01

・開かれた学校体制

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
ホームページの主たる内容(行事等)の更新回数	6.7回	6.7回	14.8回	159回	95回	85回
「尾道北高だより『槇峰』」の発行回数	9回	9回	6回	6回	8回	5回
該当中学校への本校情報提供の回数(出前授業含む)	年 21 回	年 23 回	年 21 回	年 22 回	年 20 回	年 22 回
8月のオープンスクールへの参加者	576人	649人	571人	558人	612人	542人